

埼玉西武ライオンズから3位指名

古賀悠斗捕手(法4) 夢みたプロの舞台へ

10月11日夜、プロ野球新人選手選択会議(ドラフト会議)で、中大硬式野球部主将の古賀悠斗捕手(法4)が埼玉西武ライオンズから3位で指名された。古賀選手の名前が読み上げられた瞬間、多摩キャンパスCスクエアの記者会見場では、「おーっ」という歓声とカメラマンのシャッター音が響き、大きな拍手が沸き起こった。マスク越しの古賀選手の表情にも笑みが浮かび、安心した様子なのが見えた。仲間の部員と肩をたたき合い、喜ぶ姿があった。

学生記者 齋藤優衣(総合政策4) 西沢美咲(総合政策2)



会見で質問に答える古賀悠斗選手▲

古賀悠斗捕手

こが・ゆうと。福岡・福岡大大濠高卒、法学部4年。174センチ、79キロ。高校2年秋に内野手から捕手に転向した。チームは2年秋の明治神宮大会ベスト4、翌春の選抜大会では8強まで勝ち進んだ。高校通算52本塁打の強打の捕手としてU18代表にも選出された。中大では1年春から東都リーグ戦に出場し、4年春にベストナイン。強肩が武器で、二塁送球はプロ捕手の平均とされる約1.9秒を上回る1.8秒台。「アマチュアNO.1キャッチャー」とプロの評価も高い。

緊張感に包まれる 会見場

大型スクリーンにリアルタイムでドラフト会議の映像が流れる会見場では、古賀選手や清水達也監督、樫山和男硬式野球部会長のほか、カメラマンや記者ら約40人の報道関係者、そして私たち「HAKUMON Chuo」の学生記者が待機していた。

ドラフト会議開始前、会見場に古賀選手が入場すると、カメラマンを

はじめ、皆の視線が一気に集まった。古賀選手はチームメイトと談笑し、リラックスした表情に見えた。古賀選手の両サイド、後方には、ともに野球に打ち込んできたチームメイトたちが見守るような形で陣取る。前年と同じコロナ禍で、報道陣ら全員が検温と消毒を済ませて入場し、座席もソーシャルディスタンスが保たれていた。私たち学生記者も同じ手順で席に着いた。

会議が始まると、会見場も緊張感に包まれた。古賀選手は真剣なま

なげしでスクリーンを見つめ、報道カメラマンはいつ指名が来てもいいように準備をしていた。学生記者の私も指名の瞬間を見逃さないように気を引き締めて待機した。

ついに指名 祝福と感謝

今か今かと古賀選手の名前が呼ばれるのをやきもきした思いで待ったが、1巡目、2巡目と指名はなかった。古賀選手に慌てるような様子はなく、落ち着いた様子だ。

そして3巡目。

「埼玉西武 古賀悠斗 捕手 中央大学」

歓声とシャッター音、拍手一。古賀選手もマスク越しだが、うれしそうな表情をしているのが分かった。ホッと安心したような様子で、カメラの放列に向けて一礼。硬式野球部の仲間たちも笑顔でキャプテンを祝福していた。

「正捕手を勝ち取る」

この後、会見に臨んだ古賀選手の受け答えや顔つきは、同じ学生と思えないほどしっかりとしていた。これからのプロ生活への期待と、熱い思いが伝わってきた。古賀選手は「指名されてすごくホッとしています。プロに入ってから感謝の気持ちを忘れず、1年目から勝負して、正捕手を勝ち取れるようにこれからも

上を目指して頑張っていきたい」と心境を語った。

「1年目から勝負」という言葉が印象に残っている。プロ選手になることが目標なのではなく、その後に活躍するという高い志を感じる。プレーの魅力だけでなく、人柄も朗らかな古賀選手を今後も応援していきたい。中央大学の卒業生として存分に活躍してほしい。



ドラフト指名に満面の笑み(右は清水達也監督、左は榎山和男硬式野球部会長) ▲

「キャプテンとして精神面も成長」 「レギュラーを取ってほしい」

硬式野球部・清水達也監督の話

「高校生の彼を見て、『中大と一緒に日本一になろう』と言葉をかけた。キャプテンとして自分の言動がチームに与える影響が大きいのという中で、技術的なことだけでなく、精神面でも成長した。卒業後はぜひプロでという思いだったので、(ドラフト指名に)私もほっとしています。プロに入ってから感謝の気持ちを忘れずに、1年目から勝負してレギュラーを取ってほしい」

「送球、肩に自信」「先輩の五十幡さん 古賀悠斗選手に聞く

記者会見における古賀悠斗選手の主な一問一答は次の通り。

質問(以下Q) 指名された感想と、プロ入り後の抱負を教えてください。

古賀選手 すごくほっとしています。プロに入ってから感謝の気持ちを忘れず、1年目から勝負して、正捕手を勝ち取れるように上を目指して頑張っていきたい。

Q チームとしての埼玉西武ライオンズにはどのような印象があるか。

古賀選手 ものすごく勢いがあるって、気持ちの強い選手が多い球団と思っています。

Q 目標の選手は。

古賀選手 (強肩で知られる同じ捕手の)ソフトバンク・ホークスの海野隆司選手を目標としてきました。

Q 1年目からレギュラーを目指して勝負するという話だが、どんなところを最もアピールしていきたいか。

古賀選手 自分のアピールポイントは、やっぱり送球。肩に自信があります。そこをアピールしていきたい。

Q プロで対戦してみたい選手は。

古賀選手 パ・リーグということで、(中大で)1学年先輩の五十幡(亮汰)さんが北海道日本ハムファイターズにいる。足で注目されている五十幡さん(の盗塁)を自分が阻止したい。セ・リーグだったら(横浜DeNAの)牧(秀悟)さんの名前を出そうと

思っていました。

東都入れ替え戦、 リーグ優勝… さまざまな経験

Q 中央大学で学んだことを、プロでどうやって生かしていきたいか。

古賀選手 この4年間、いろいろなことを学んだ。入学当初には(東都リーグの)入れ替え戦という、ものすごくきつい思いを味わった。その次の年には優勝という素敵な経験をして、「どうやったら負けるのか」「どうやったら勝てるのか」を大学時代で味わった。自分が大学に入った理由も、知識だったり引き出しだった

りを多くして、プロの世界に入りたかったから。この4年間で学んだ価値観などをプロに入ってから生かしたい。

Q 4年前の高校3年時のドラフトで、同学年の村上宗隆選手(九州学院高→東京ヤクルト)、清宮幸太郎選手(早稲田実高→北海道日本ハム)、中村奨成選手(広陵高→広島)らが1位指名され、4年がたって古賀選手も同じステージに立つことが決まった。今の率直な気持ちを聞かせてほしい。

古賀選手 自分は大学進学と決めて、仲間たちがどこの球団に行つて、この4年間、どういう活躍をしているのかということに興味津々に見



チュー王子を手に笑顔の古賀悠斗選手▲

に負けない」「中大でさまざまな学び」

てきた。高校の時は仲間だったが、プロの世界に入ったらライバルになる。争って切磋琢磨していきたい。

Q 自分自身が成長したと思うところは。

古賀選手 入れ替え戦で経験した試合の緊張感だったり、その心の部分で、どんな苦しい試合でも戦えるような心を持てた。これがこの4年間で一番自信をもてることです。

Q 高校(福岡大大濠)でバッテリーを組んだ三浦銀二投手(法政大)が横浜DeNAに指名された。

古賀選手 三浦とは対戦したいなと思うが、最終的な考えを言うと、もう一度バッテリーを組みたいという気持ちが大きい。プロの世界でいえば、侍ジャパンであったり、まだ先のこともかもしれないが、自分是对戦というよりはもう一度バッテリーを組みたい。

「キャプテンとして人間的に成長できた」

Q 中央大学野球部の活動で一番印象に残っていること、学んだことは何か。

古賀選手 一番印象に残っていることは、去年、今の自分と同じ会場で牧さんと五十幡さんが自分の目の前で指名された瞬間。学んだことは、やはり入れ替え戦や、きつい練

習で培われたメンタル。キャプテンとして人間的にすごく成長できたと思っている。自分のことよりもチームのこと、チームのために何をしたらチームが良くなるか、そういうことを幅広く考えられるようになった。

Q プロに入って学んでいきたいことは何か。

古賀選手 ピッチャーとのコミュニケーションであったり、環境だったり、年間を通して戦える体だったり、そうしたことをどうやったらうまくできるのか。またスタートラインに立ったので、一から話を聞いてやっていきたい。

Q 中央大学でどのような学生生活を送ったか、野球と学生生活の両立は。

古賀選手 中央大学にきて、最初の2年間は学校に来て授業を受けていたが、3年生になってから新型コロナがはやった。リモート(授業)という難しい形ではあったが、その中でいろいろな友達や関係者の方に出会えた。中央大学に来て、人脈の広がりだったり、いろいろな話を聞いての学びがあった。

Q 後輩にメッセージがあれば聞かせてほしい。

古賀選手 自分が果たして良いキャプテンであったかはわからないが、自分がやってきたことは間違っていないと思う。自分がこの4年



▲ライオンズのタオルを手にする古賀悠斗選手

間学んだことや、キャプテンをこういう気持ちでやっていったんだよ、ということを3年生たちにこれからも伝えていきたい。

指名に満面の笑み 「親しみやすく応援したくなる人柄」

古賀悠斗選手が埼玉西武ライオンズから指名を受けると、会見会場が拍手で包まれた。古賀選手が安堵の表情をみせると、私の胸も喜ばしい気持ちでいっぱいになった。

ドラフト会議が行われた10月11日は、もともとは「スポーツの日」であった(東京五輪の関係で2021年は祝日にならなかった)。私はどこか不思議な縁を感じながら、記者会見が行われる多摩キャンパスのCスクエアに向かった。会場には多くの報道陣や硬式野球部員たち、大学関係者が集まっていて、少し不安なような、それでいて晴れ晴れしい祝福の門出の前触れのような、張り詰めた空気が漂っていた。

私自身が大学4年生ということもあり、就職活動を体験した身としては非常に緊張する取材であった。この時間で大学卒業後の進路が決まると思うと、ドラフト会議の間中、どの選手も落ち着かなかったはずだ。一般的な会社でもいえることだが、採用の際にはその人物が優秀かどうかとは別に、組織におけるバランスも考慮される。ドラフト会議を見ていて、プロ野球界は特にその傾向が強いのではないかと感じた。年によっても、監督によっても、「チームに求められる力」というのは変わってくる。力のある選手であっても、球団に必要とされるかはまた別の話である。だからこそ注目度も高い

し、指名された選手にとって喜びもひとしおなはずだ。

記者会見の後、私たち学生記者は古賀選手のもとへ向かった。指名後すぐの会見では、少し硬い表情で受け答えしていた古賀選手が満面の笑みをみせてくれた。にっこりした様子に、私もほっとした。一緒に記念撮影をし、「おめでとうございます」と声をかけると、「ありがとうございます！頑張ります」と丁寧に答えてくれた。とても親しみやすく、応援したくなる人柄だと感じた。インタビューで次の目標をしっかりと答えていたのをみて、私自身も頑張ろうと力をもらえたような気がした。

私は大学1年生の時から、この「HAKUMON Chuo」で学生記者の活動に携わっている。初めて取材したのは、会社員として働く傍ら、プロのダーツ選手として活躍する中大卒の女性であった。2年時には箱根駅

伝の予選会の様子取材した。新型コロナウイルスが猛威を振るった3年時はコロナ禍での日常生活の変化や、自身の暮らしている寮生活について執筆した。

そして4年生となった今回、プロ野球のドラフト会議という、選手の人生の節目となる貴重な場面取材させていただいた。どの体験も刺激的で、特に取材ではその方の人柄や思い、生き方について触れることができた。

普段の生活では関わることのない人たちに出会うことは、自分自身にとって大きな学びとなった。駅伝やドラフトなど数々の“瞬間”に遭遇できたことは、きっとこれからも忘れないと思う。取材を通して、こうした瞬間やその人の思いをくみ取り、伝えることができるというのは、非常に貴重な経験であると感じている。

(学生記者 齋藤優衣)



古賀悠斗選手と学生記者の齋藤優衣さん(右)西沢美咲さん(左)▲

古賀選手から勇気とパワー 「取材のプロがすぐそこに」貴重な経験



報道陣からの写真撮影の注文に応じる古賀悠斗選手▲

今回は、私にとって初の対面での記者会見という形の取材となった。新型コロナウイルスの影響で、オンラインによる取材や、学生記者1人での取材が多かったため今回の取材をとっても楽しみにしていた。また、もう一人同じ総合政策学部の4年生の齋藤優衣さんも一緒に取材をしたため安心感があった。

会場に足を踏み入ると、すでに多くの報道陣の方々が場所をとっていた。初めての経験だったため、内心緊張した。初めて見るテレビ局のカメラマンや、記者の方々。プロが仕事をする姿を近くで見ることができたこと、本当の記者のような経験をできたことは、学生記者ならではの貴重な経験だったと思う。

古賀悠斗選手は3巡目で埼玉西武ライオンズから指名された。会場は歓喜に包まれた。マスク越しでも分かる古賀選手のうれしそうな表情が印象に残っている。古賀選手や硬式野球部員が喜ぶ姿を見て、私もうれしい気持ちとともに安心感を覚えた。古賀選手にとって最高の瞬間を取材できたことを喜ばしく思っている。

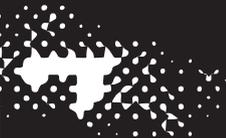
その後の記者会見での古賀選手の姿は、堂々としていて大人びた印象を受けた。同じ大学生と思えないような立派な姿は、これからプロの世界へ踏み出すのにふさわしい人だと思った。そして、「1年目から勝負」という熱い思いと希望に満ちた古賀選手から、勇気とパワーをもら

うことができた。今まで野球を頑張りが続き、夢のプロの世界に入ることが決まった古賀選手の姿を取材して、私もこれからの学生生活を全うし、来年に控えた就職活動に向けて頑張っていきたいと思った。

会見終了後、古賀選手と写真を撮ることができた。写真を撮る際に「ピースしますか?」と気さくに話しかけてくださったのが印象的だった。顔の表情がほぐれていて、さっきまでの緊張が解けた様子だった。「頑張ってください」と言葉をかけた。親しみやすく、礼儀正しい古賀選手は人柄もすばらしかった。同じ中大生として今後の活躍を応援したいと思う。

学生記者の取材を通して、さまざまな分野やスポーツで活躍する人と接してきたが、礼儀正しく応援したくなるような人が多い印象だ。取材を通して、私自身に頑張ろうと思わせてくれる。今回の取材でも、古賀選手から力をもらうことができた。私にはまだ中大生として過ごす時間があるので、学業やサークルなど後悔のないように有意義な学生生活を送りたいと思う。

(学生記者 西沢美咲)



全力を出し切った先の “勝利”をつかむ！



箱根駅伝で“中大復活”を 陸上競技部長距離ブロック(駅伝)マネジャーが思いを綴る

(上)全日本大学駅伝対校選手権で8位でゴールする手島駿選手©Getsuriku (下)陸上競技部長距離ブロック(駅伝)チーム©Getsuriku▲

今回こそ力を出し切る一。新春1月2、3日の第98回箱根駅伝に向け、陸上競技部長距離ブロック(駅伝)チームが上げ潮ムードで最終段階の調整に入ろうとしています。箱根予選会(10月23日)を2位で通過、9年ぶり出場の全日本大学駅伝対校選手権(11月7日)では翌年のシード権を得られる8位に入り、正月に向けて弾みをつけました。長距離ブロックの上級生(3、4年生)のマネジャー3人に今年のチームへの思いや箱根への期待などを綴ってもらいました。

厚い選手層 全日本の成功体験を追い風に



マネジャー 萩野結月 (商4)

マネジャーとして4年間見てきた中で、今年のチームは一番選手層が厚いと感じています。全日本大学駅伝対校選手権の選考会(6月)もチームの軸である吉居大和、森凧也がいない中で、9年ぶりに出場権を獲得できました。

しかし、箱根駅伝予選会は不安もありました。夏合宿以降、故障する選手が目立ち、調子が上がらない選手もいたからです。そうした中で迎えた箱根予選会では、1位の明治大には差をつけられてしまいま

したが、2位通過できたことはチームとしても自信になりました。

11月の全日本大学駅伝対校選手権は“全員駅伝”で8位に入り、翌年のシード権を獲得できました。この成功体験は必ず追い風になると思います。苦しい下級生時代を過ごした手島駿、箱根予選会で思うように走れなかった三浦拓朗の2人が4年生の意地を見せてくれて、心を打たれました。マネジャーをやって本当によかったと思いました。

箱根駅伝では10年ぶりのシード

権獲得を目指します。今まで選手の苦しむ姿をたくさん見てきました。常に結果を残し続けるのは非常に難しいことです。でも、みんなの頑張りはだてではありません。私はそんな選手からいつも力をもらっています。ぜひ箱根路を楽しんで駆け抜け、今ある力を出し切ってほしいと思います。

チーム一丸となって全員駅伝で頑張らしましょう!

「最高のパフォーマンス」のためのサポート



すいどう

マネジャー 出納佳 (商3)

今年の新チームが始動するとき、藤原正和監督やコーチから「マネジャーの選手に対するコミュニケーションが全体的に足りていない」と指摘されました。私だけでなくマネジャー全員が「痛いところを突かれた」と思ったはずです。マネジャーとして、普段の練習のタイムの計測やデータ管理だけでなく、選手一人ひとりをよく見て、本番で最高のパフォーマンスをしてもらう

ためのサポートをしなければならないと、改めて身が引き締まりました。

陸上競技部の一員として長い時間を過ごすうちに、どんどん選手たちやチームを好きになっていきます。「心から、頑張ってほしい」。中大が一番だと思います。毎日頑張っている選手たちと一緒に過ごしていて、そう感じます。だからこそ、気持ちを込めて全力で選手たちと向き合わなければいけないと

思っています。

最近では、練習の終わりに選手たちにその日の状態を確かめたり、大会前後にはモチベーションや振り返りを聞いたりしています。箱根駅伝の本戦で選手たちが最高の走りをできるよう、これからもっと努めていきたいです。

全日本大学駅伝対校選手権(11月7日)は選手たちのこれまでの努力が実った結果となり、“走り”で伝

える"とはこのことだと感じました。出走した選手はもちろん、サポートや応援した選手全員で真紅の襷を

つなぐことができました。このチームの一員であることが本当に幸せです。これからも私たちマネジャー

にできる形で、応援してくださる皆様に感謝を伝えていけるよう精進していきます。

箱根の結果で 感謝の気持ちを伝えたい



マネジャー 炭山遥香 (経済3)

全日本大学駅伝対校選手権(11月7日)で8位に入賞し、シード権獲得という目標を達成しました。「作戦通りに走り、目標を達成する」。繊細で何が起こるかわからないレースにおいて、このことがとても難しく、また、達成することにどのような意味があるのかを、このチームはとてもよく知っていると思っています。この目標を全員で達成できた成功体験こそが大きな収穫のように感じました。

今回の全日本を見て、今までで

一番、選手たちが迷いなく走っているように感じました。常日頃、藤原正和監督が言われている「結局は気持ち」という意味を、全日本での走りを通して理解できたようにも感じたレースでした。今まで先輩方や、応援してくださる皆様が「中央大学」という伝統と襷をつないでくれたこと、何度も悔しい思いを味わった「気持ち」の大きさが選手たちの気迫となり、手にした成功だと感じています。

マネジャーとして、チームの一員

として、この大きな転機に立ち会えたこと、選手やチーム、応援してくださる皆様から、いろいろな学びや発見を頂いていることをとても幸せに思います。ここからは箱根駅伝本戦に向けて、選手が本来の力を発揮し、自身が思い描く走りができるよう、チームや応援して下さる皆様に恩返しできるよう、自分にできることに精いっぱい取り組み、結果で感謝の気持ちをお伝えできるよう、チーム一丸となって進んでいきたいと思っています。

秩父宮賜杯第53回全日本大学駅伝対校選手権成績

(愛知・熱田神宮-三重・伊勢神宮、8区間106.8キロ/上位10校)

順位	大学名	記録(時・分・秒)
①	駒沢大	5・12・58
②	青山学院大	5・13・06
③	順天堂大	5・14・20
④	国学院大	5・14・53
⑤	東京国際大	5・15・13
⑥	早稲田大	5・16・29
⑦	明治大	5・16・46
⑧	中央大	5・17・06
⑨	法政大	5・17・39
⑩	東洋大	5・17・58

(8位までが来年のシード権獲得)

第98回箱根駅伝出場校

●シード校 (前年上位10校)

駒沢大
創価大
東洋大
青山学院大
東海大
早稲田大
順天堂大
帝京大
国学院大
東京国際大

●予選会上位10校

順位	大学名	記録(時・分・秒)
①	明治大	10・33・22
②	中央大	10・37・38
③	日本体育大	10・39・32
④	山梨学院大	10・41・15
⑤	神奈川大	10・41・57
⑥	法政大	10・42・12
⑦	中央学院大	10・43・08
⑧	駿河台大	10・44・47
⑨	専修大	10・44・58
⑩	国土館大	10・45・41

関東学生連合(オープン参加)

ムードメーカー

期待のメガネランナー

選手の特長・性格～マネジャーのひとこと

軽快で強気の走り

よく歯磨きをしている?!

陸上競技部長距離ブロック(駅伝)のマネジャーに、
同じ学年の選手の特長や性格などをひとことで表してもらいました。(学年後ろはマネジャー名)

4年生

(萩野結月)

●井上大輝選手(主将)

「頭の切れる信頼の厚いキャプテン。常日頃から面白さを求めている生粋の関西人」

●手島駿選手

「面倒見がよく、いつも後輩を引き連れている。学年を追うごとに強さと安定感が増している選手」

●三浦拓朗選手

「ムードメーカーだが意外としっかり者。“オフショット王”であり、さまざまな表情を見せてくれる」

●森凧也選手

「競技に対して人一倍熱い想いを持っている。少し毒舌だが、実は優しい」

●倉田健太選手

「一般生ながら関東インカレ入賞を成し遂げる、長い距離に強い選手。よく歯磨きをしている」

箱根駅伝予選会を走り終えてがっちり握手▶
©Getsuriku

3年生

(出納佳、炭山遥香)

●助川拓海選手

「のっているときはとことん強い。3年生になり気合と根性、頼もしさも手に入れた」

●田井野悠介選手

「ストイックで野心家。日々の努力が結果につながることを証明してくれる人」

●中澤雄大選手

「個性が光る“哲学ランナー”。勝負強さと軽快で強気な走り
でチームを引っ張る存在」

●若林陽大選手

「自分に厳しく責任感が強い。下りでは普段とは全く違う姿が現れる」



2年生

(怡土涼香、小林菜緒)

●伊東大翔選手

「淡々としていて積極的な走りを見せる半面、おっちょこちょいな一面も…」

●中野翔太選手

「苦勞の1年を乗り越えた、実はツンデレな今年期待のランナー」

●吉居大和選手

「後輩とも仲良し。ちょっぴり照れ屋な、学年を走り引張る存在」

●湯浅仁選手

「輝く笑顔でみんなに愛される、学年をまとめる頼もしい存在」

1年生

(阿部朱音、橋本怜南)

●阿部陽樹選手

「飄々(ひょうひょう)としているが、大事な局面で求められた以上の結果を出す期待のメガネランナー」

●東海林宏一選手

「普段はお調子者だが、誰よりも負けず嫌いな熱い心の持ち主」

●矢萩一揮選手

「素直で誰に対しても優しく、笑顔がとっても可愛いチームの愛されキャラ」

●箱根駅伝予選会 中央大学・出場12選手成績●

全体順位	選手名(学年)	記録(時・分・秒)	全体順位	選手名(学年)	記録(時・分・秒)
13	吉居 大和 (2)	1・02・51	76	東海林宏一 (1)	1・03・58
32	阿部 陽樹 (1)	1・03・28	78	助川 拓海 (3)	1・03・59
36	手島 駿 (4)	1・03・30	82	中野 翔太 (2)	1・04・03
40	中澤 雄大 (3)	1・03・34	107	森 凧也 (4)	1・04・26
61	田井野悠介 (3)	1・03・52	173	三浦 拓朗 (4)	1・05・22
74	湯浅 仁 (2)	1・03・57	283	山平 怜生 (1)	1・07・14

駅伝当日の応援や観戦目的の外出は控えましょう。

「私の夏休み」

学生記者の体験

コロナ禍の真ただ中にあった今年の夏は、部活やゼミ、サークルなど、さまざまな活動に何らかの制限があったことと思います。そんな夏の長期休暇中に「HAKUMON Chuo」の学生記者は何を体験し、何を感じ、何を学び得たのか。3人の学生記者の夏休みを紹介します。

息、身、心を調べて得た 「生の実感」

ぷ〜ん。右耳の近くを蚊が飛んでいる。どこかに行ってくれと願った。だが、一向にモスキート音は鳴り止まない。

ギロリ。お坊さんの目がこちらに向いた。バシン、バシーン。人生で初めて警策で叩かれた。想像以上の痛みに、背筋がピンと伸びた。

夏休みに広島に帰省し、福山市にある「神勝寺 禅と庭のミュージアム」を訪れた。広大な敷地には、伝統的な枯山水や、現代建築の展示施設などがあり、見どころは満載だ。

だが、一番の魅力は、施設内にある国際禅道場で、坐禅体験ができることろだと思う。

お坊さんから マンツーマン指導

どんな人たちが、集まっているのだろうか。ワクワクしながら、お昼過ぎに集合場所の入り口に向かった。しかし、誰もいない。すぐに、講師のお坊さんがいらっしゃった。まさかの、マンツーマンだ。「手厚い指導が

受けられる」と前向きに捉え、坐禅堂まで一緒に歩いた。

「これは1500年ごろに鎌倉で建てられたものを移築したものなんですよ」。お坊さんは立派なお堂を指さした。修行僧はここに宿泊することもあるそうだ。座布団に布団の字が入っているのは、そういうわけかと納得した。実際に、坐禅堂にあったものを広げると男性の身長くらいになる。座ることも、寝ることもできる。日本式“2WAY”のルーツを見たような気になった。

鈴木人生
(文3)



足の組み方を教えてもらい、姿勢や目線を指導していただいた。「では、始めましょう」。お坊さんはち〜んと、おりんを鳴らした。坐禅スタートだ。音が堂内に広がった後、今度は逆に静まり返った。半目で、少し先を見つめ、余計な視覚情報を遮断する。そして、「息」「身」「心」の3つを調えていく。まずは、呼吸と身体。丹田(たんでん=へそ下)を意識して息を吐いて、吸う。基本的には、吐く方を長く、吸う方を短くする。息を吸ったとき、「今ここに生きていること」をより深く実感するためだ。背筋を伸ばし、姿勢を正す。こうして徐々に、心も調っていく。

90分という短い体験だったが、本当に一瞬で時間が経った。よほど集中していたらしい。お坊さんに礼を言い、禅堂を後にした。坐禅を通して、この感覚が大切なんだと気づいた。

坐禅で 心を静める術を学ぶ

お寺を訪ねる1週間前ほど前、地元を豪雨が襲った。緊急安全確保が発令され、近所の小学校体育館に避難所が開設された。避難すると、受付で薄いベージュの毛布を渡された。館内を見渡すと、20人ほどの避難者が壁沿いに横になっていた。仕切りや簡易ベッドなどはなく、プライバシーや居心地に十分な配慮があるとはいえない。横になろうと、毛布を広げると、黒いものがパツと落ちた。虫の死骸だった。床には、白い埃が見えた。衛生的にも、あまり良い環境とはいえなかった。

夜が更けると、フローリングの床に毛布1枚で寝ているせいか、隣で眠るおじいさんは「痛い、痛い」と寝言を発した。あお向けになると、電灯の緑色の光で目が眩んだ。町内会



▲神勝寺の鐘を撞く
学生記者の鈴木人生さん



の役員を務める知り合いのおじいさんに「暗くしないんですか？」と尋ねたが、「うん、しない」と即答された。私は睡眠を諦めた。

自治体の避難所には、それぞれさまざまな事情があり、避難所生活はストレスと無縁ではない。だが、これからは坐禅の教えを思い出して、心を調べようと思った。ストレスを感じたときにこそ、坐禅が役に立つはずだ。心を静める術を学んだ夏になった。

◀鈴木さんが坐禅を組んだ
広島県福山市の神勝寺

制約がある中でも 充実した時間を過ごす

西沢美咲
(総合政策2)



大学2年生の夏休みは、コロナ禍で制限されることも多くありましたが、昨年よりも充実したものになりました。8月末までに2回のワクチン接種を済ませて、感染症対策をしながら旅行に行ったり、制限の中でもサークル活動をしたり、SNSマーケティングの長期インターンに取り組んだりしました。

ワクチン接種は自分の安心にもなり、周囲の人のためにもなったと思います。接種の2週間後には、1年ぶりに祖母の家を訪ね、大学生活の話をしたり、祖母の手作りの料理を食べたりして、とても楽しく充実した

時を過ごせました。ワクチン接種後も引き続き感染症対策は必要ですが、今まで会えなかった人にも会えるようになり、喜びを感じました。

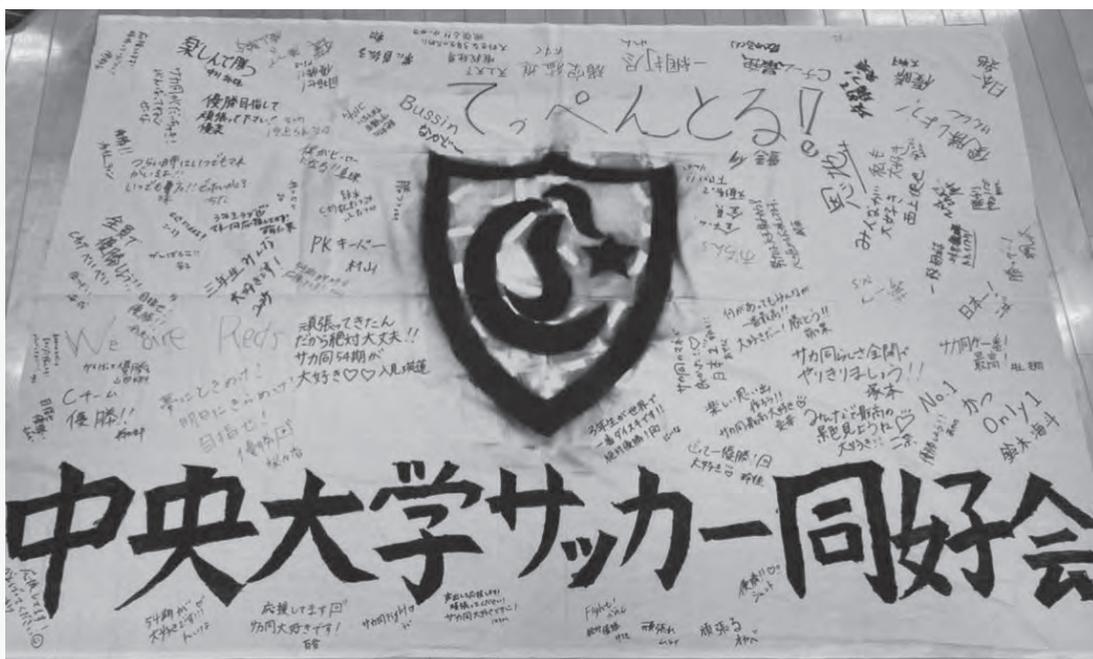
「マガ杯」へ、 ミサンガづくり

私が所属している「中央大学サッカー同好会」は、感染症対策を続けながら夏休みも活動していました。暑い日が続きましたが、練習でプレイヤーがボールを追いかけ、グラウンドを走り回る姿が印象に残っています。私たちマネジャーも日傘

をさし、日焼け止めを塗って参加しました。

特に印象に残っているのは、毎年9月に開催されるサッカーマガジンカップ(マガ杯)という大会です。今年は参加人数に制限があり、日帰りで行われるなど例年とは異なる形での開催でした。私はプレイヤーに渡すミサンガをマネジャー同士で教え合いながら一生懸命に編みました。ミサンガの受け渡しはサッカー同好会の伝統であり、長年受け継がれてきています。

大会前日に決起集会が行われ、皆が一つになって大会への気持ち



▲寄せ書きが記された中央大学サッカー同好会の旗

を高めました。3年生にとっては最後のマガ杯となるため“熱量”を感じ、コロナ禍で参加人数は制限されましたが、皆で行う決起集会は感動的でした。来年は全員で参加できる環境になればいいと思います。

企業で SNSマーケティングの インターン

今年4月から始めているSNSマーケティングの長期インターンでは、夏休みで長時間の勤務も可能となり、

多くのことを学びました。SNSマーケティングとは、ツイッターやインスタグラムなどを使って企業やサービスに対する顧客のロイヤルティ（愛着や信頼）を高めるのが狙いのひとつです。

私の仕事は、運用に携わっている企業のアカウントに掲載する写真を選び、その評判がどうだったかを数値をもとに考察するというのが基本的な流れです。職場では、他大学の先輩の話を聞けたり、昼休憩で一緒にランチを食べたりと、仕事以外にも充実した時間を過ごしました。後期も学業と両立しながら頑張ってい

きたいです。

ほかにも、友達と一緒に美術館やカフェに行き、9月には京都に旅行をしました。コロナ禍の美術館はチケットが予約制で、入場も“密”を避けるため時間で区切られていました。旅行も感染症対策をしながら満喫できました。ただ、コロナが収束して気兼ねなく旅行できるようになり、大学生のうちに海外旅行も経験できたらうれしいです。素敵な思い出を作るためにも、以前の生活に近づく日が来ることを改めて願っています。

森美樹

(文2=哲学専攻)



「分ける」ことは「分かる」こと ～自分の理解力不足を痛感した読書会～

「『分ける』ことは『分かる』こと」。そういった言葉をどこかで聞いたことがある。流れ込んできた情報を分別し、整理することによって人はそれを理解するという意味だが、私は夏休みの読書会を通じて、そのことを身をもって知った。

その読書会は哲学専攻の1年生が対象の「英語読解」を担当する文学部の太田稔兼任講師と大塚諒兼任講師が開催した。私も昨年に太田先生の授業を受け、古代哲学に関する英語のテキストを読解した。この

先生方による読書会は昨年に続き2回目、開催のきっかけは、「コロナ禍においてオンライン一色になり、日々ひとりで授業や課題と向き合っている学生のために、もう少しいろいろな学びの場や交流の場を提供したい」という気持ちからであったと太田先生に伺った。

神崎繁先生の 「魂への態度」を読む

私自身、ずっと家にいたため、

Webexで読書会に参加し、先生方と議論できたことは楽しい思い出として心に残っていた。そして、今年も読書会があるならぜひ参加したいと太田先生に連絡したところ、大塚先生と開催して下さることになった。今年は週1度、2～3時間ほどで全8回、Zoomで行われた。

課題本は、神崎繁先生の「魂(アニメ)への態度」で、古代西洋哲学を専門とする哲学者である筆者が、魂をテーマに、ギリシャの叙事詩などがどう読まれていったかを追いな

ら、主に古代哲学とそれによる後代への影響を論じたものである。

また、ある一部分の訳し方の違いにより、文全体の解釈が正反対になったり、登場人物の人物像が大幅に変わってしまったりということも書かれていた。私はそういった翻訳や解釈の違いを考えることが好きなので、この本はとても興味深く、また、自分が翻訳や解釈をする際の姿勢についても振り返るきっかけとなり、身が引き締まる思いがした。

内容の理解に難航 「ひたすら分からない…」

太田先生にこの本を選んだ理由を尋ねると、神崎先生は古代哲学を志したものであれば誰もが尊敬する存在で、昔、この本を十分に読み切り理解することができなかった経験があり、心残りがあったためであると聞いた。私はそれまで神崎先生のこととは名前しか存じ上げなかったが、今回のように自分が普段手に取らないような本を読む機会が得られたのも読書会の良いところだと思った。

読書会は参加した学生が交替で

作成したレジュメを元に進行したが、レジュメがなかった場合は、先生方がレジュメを作成しながら進行した。私もレジュメを作る機会をいただいたが、まず、本の内容を理解することに難航した。日本語で書かれているのに意味が分からない。ひたすら分からない。何が分からないのかも分からない。深い霧に包まれた知らない土地で迷子になったような気分だった。

他の哲学書を読んでいるときも同じような感覚に囚われることがある。だが、今回はレジュメを作る必要があったため、内容がほとんど分からないながらも、とりあえずキーワードらしき単語を順にメモしていき、1章を内容ごとに節に区切って、それぞれに見出しをつけた。そして、最初から読み直しながら、それぞれの節の重要な箇所を抜き取り、要約して内容をまとめた。

「考えや思いを丁寧に 汲み取る」

そうすると、ただ読んでいるときには分からなかった文章が、少しずつ分かるようになってきた。そしてレジュ

メをもとに読書会が進行する中で、先生や他の人の意見を聞いたり、議論したりすることで、新しい視点を知り、自分一人では見えなかった景色が見えてくるようになった。これこそが読書会の醍醐味だ、と思った。

この読書会を通じて「分ける」ことは「分かる」ことを実感した。哲学書の読解に限らず、理解するということは切れ目の分からないグラデーションを切り分けて、その一つずつに名前をつけていくようなことだ。しかし、切り分け方やラベリングを間違え、理解した気になっているだけで実はひどく誤解をしていることもあるかもしれない。何かを正確に理解することはとても難しいし、そもそも無理なのかもしれないとも考える。でも、出会った本や出会った人々の考えや思いをできるだけ汲み取れるように、その一つずつ、その一人ずつと丁寧に向き合っていきたいと思う。

読書会を開催し、ご自身の体験を交えた興味深い話をたくさんしてくださいました太田先生と大厩先生、読書会に参加して下さった方々、そして素晴らしい本を後世に遺して下さった神崎先生に感謝を述べたい。

学生記者になりませんか？

「HAKUMON Chuo」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在学学生を対象に学生記者を募集しています。

2020年10月のプロ野球ドラフト会議で指名された中大硬式野球部選手の記者会見の様子▶



- ☆元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ、添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です！
- ☆取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- ☆記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

【申し込み・問い合わせ】 中央大学広報室「HAKUMON Chuo」編集担当：北村 豊 E-mail: hc-grp@g.chuo-u.ac.jp